

森の時計／2021年3月

～森の時計はゆっくり時を刻む～
～灯は小さくても いつもあったかい～

岩見沢仮説サークル／岸 広昭

「進路通信」から

① 教養のある人ってどんな人？ (No.39)

ボクが小・中学生の頃 (大学生の頃もそうかも)、テレビでの野球中継といえば、ほとんど巨人戦でした。だから、パリーグのチームの認知度はかなり低かったし、セリーグであっても巨人以外のチームの選手の露出度は巨人の5分の1といった感じです。当時、ボクは川崎に住んでいたのですが、川崎球場が本拠地だった「大洋ホエールズ」の選手のことを知っていてもよさそうなのに…。そんなボクでも広島カープで活躍した衣笠祥雄選手は印象にのこっているのです。先日、週刊誌をながめていると、衣笠選手について書かれたものがありました。

「鉄人」と呼ばれ、連続 2215 試合出場 (当時の世界最高記録) を達成した衣笠祥雄さん (2018 年逝去、享年 71)。だが、その記録があわや途絶えそうな瞬間があった。1979 年 8 月 1 日、広島市民球場で行われた巨人対広島戦で事件は起きた。



7-1 と巨人の大量リードで迎えた 7 回裏、広島の攻撃。巨人のピッチャー西本聖が投げた初球が、衣笠の左肩に直撃したのだ。デッドボールを受けた衣笠は、あまりの痛さにその場で、うずくまってしまった。

西本さん本人がああ場面を振り返る。

「自分はまだ 5 年目で、一軍に定着し始めたばかりでした。あの場面は 2 アウト、二塁のピンチ。『なんとか結果を残さなければ』と思い、得意のシュ

ートで内角を攻めようとしたのですが、力んでコントロールミスしてしまったのです。『当てた瞬間は大変なことをしてしまった』と頭の中が真っ白になりました」

当時、衣笠さんは、1122 試合連続出場中で、日本記録の更新まであと 125 に迫っていた。そんな大打者に、駆け出しの若手投手がぶつくとあって、広島ファンからも「生きて帰れると思うなよ」と罵声が飛んだ。

両チームの選手がベンチから飛び出し乱闘騒ぎになる中、西本さんは衣笠さんの元に駆け寄り、「すみません。大丈夫ですか」と話しかけた。すると衣笠さんは小さな声で「危ないからベンチに帰っておけ」と返した。「痛みもあるし、記録もかかっていたわけだから『どこ投げとんじゃ!』と怒られると思っていたのですが、まったく予想外の言葉が返ってきたので、びっくりしました」

その後、試合は再開するも西本さんは走者一掃の二塁打を浴びノックアウト。結局試合も 8-8 の同点で終了する。

宿舎に帰ってから、西本さんは改めて衣笠さんに謝罪の電話を入れた。ここでも衣笠さんは怒らずに「(お前が) 勝てるゲームだったのに損したのう」と大人の返しをみせた。

だが、次の日、ホテルで西本さんが休んでいると、昨日の死球で、衣笠さんが左肩の肩甲骨を骨折していたという情報が入ってくる。

「さすがに骨折では、今日の出場はないだろうと思っていました。同時に『自分が連続出場記録を止めてしまった…』という自責の念に駆られていました。ところが、ホテルのテレビで試合を見ていると、昨日と同じ 7 回裏に衣笠さんが代打で登場したのです」

この日マウンドに立っていた江川卓の剛速球に 3 球三振を喫するも、全球フルスイングを見て、ファンからは大きな歓声があがった。

試合後、衣笠さんは、「1 球目はファンのため、2 球目は自分のため、3 球目は西本君のためにスイングしました」とコメントした。

「その言葉を聞いて、涙が出そうでした。もし、あの心遣いがなければ、精神的に参ってイップスになり、投げられなくなっていたでしょう。その後、20 年間もプロとしてやっていくことができたのは、衣笠さんのおかげです」人がミスしたら黙って背中を押してやれ――。

衣笠さんの教えを胸に、西本さんは今日も後輩たちの指導にあたっている。

「人の気持ちがわかる」こと、そして動けること。それが一番の教養なの

かもしれないと思います。教養のある人にならなくてはいけないですね。

② 「いいからいいから」の哲学 (No.40)

高知県に宿毛という小さな町があります。「すくも」と読むのだけれど、読めましたか？高知県には有名な岬が2つあります。東（紀伊半島より）にあるのが室戸岬／西（九州より）にあるのが足摺岬ですが、宿毛はその足摺岬の付け根にある町です。これまでに何度も行っている町ですが、仮説実験授業に出会わなかったら一生行くことがなかった町だろうなとも思います（と書いたところで、高校の修学旅行のときに通ったことを思い出しました）。最初に訪ねたのは、1991年8月のこと。それからというもの、8月に開かれていた小さな会に毎年のように参加しました。真夏の高知は太陽の光の強さが半端ではありません。ジリジリと焼けるような陽光です。早起きをして会が始まるまでよく岸壁で釣りをしたのですが、真っ赤に日焼けして（というか火傷）、お風呂に入ると痛くて大変でした。清流・四万十川でカヌーもしました。穏やかな流れでも、膝まで浸かると思ったように歩けなくなることを知りました。

この宿毛には、「キリン館」という小さな本屋さんがありました。経営していたのは仮説実験授業研究会の友だちである岡田哲郎さん（12歳年上ですが）。10年ほど前に宿毛に行ったとき、食事をしながら話をしているなかで、長谷川義史さんの『いいから いいから』という絵本が面白いよと教えてもらいました。そこで、



旭川に戻ってすぐに購入。まず、本の帯に書いてあった言葉がよかった。

ある小学校のクラスで朝の時間に絵本『いいから いいから』を読んだそう。お昼になって給食のとき、ある子が給食のお盆をひっくり返したそう。牛乳もお味噌汁もおかずもご飯もみんな飛び散ったそう。そしたら、クラスの子が片づけを手伝ってその子に言ったそう。「いいから、いいから」って。（中略）怒ってはいけない。誰かが怒ると誰かに伝染して、誰かがまた怒る。それがまた誰かに伝染して、な一人にもいいことない。世界が平和になって欲しいと本気で考える。合い言葉は「いいから、いいから」。